

## 「資源工学科の骨」

資源工学科主任

名古屋 俊士

1994年9月に資源工学科の主任を引き受けてから、はや1年半が経ちました。昨年の4月からは、1年生の担任と二足の草鞋を履いて、教室の先生方の協力を得て何とか無事に過ごしてきました。

昨年も報告しましたが、大学カリキュラムの改定にあわせて資源工学科でも、分野の全面的な見直しを行う等、近年にない大幅なカリキュラムの改定を行いました。その成果がどのような形で本年度の入試に表れるかと思っておりますところ、若干ではありますが受験者が増え、理工学部において建築学科と共に入試の実質倍率が平成6年度3.1、平成7年度4.2倍、平成8年度5.6倍と高くなる傾向にある学科になりました。こうした傾向に満足することなく、さらに力強い一歩を踏み出さなければならないと思います。

この1年色々なことがありました。4月に97名の新入生（内、女子学生が過去最高の13名）に嬉しい(?)悲鳴を上げました。しかし、残念なこともありした。それは、岩崎孝教授が定年まで数年残して、本年3月末日をもちまして選定年制度により退職されます。先生は昭和28年3月早稲田大学理工学部鉱山学科を卒業され、

同年4月早稲田大学大学院理工学研究科に入学し、昭和40年3月博士課程を修了しました。その後、昭和34年4月より早稲田大学理工学部助手となり、昭和55年助教授、昭和60年教授となられ、本年1月まで資源工学科において講義並びに学生指導に当たられてきました。この間に、多くの優秀な卒業生を世に送り出すとともに、学外でも鉱山保安試験審査会長や資源素材学会副会長、骨材資源工学会会長等の要職に就き、資源工学科の為に活躍して頂きました。誠に有り難うございました。

資源工学科にとって悲しいことが有りました。それは、資源工学科の名誉教授であります伏見弘先生、萩原義一先生、大塚良平先生の3先生がこの世を去られたことです。

平成7年6月15日に伏見弘先生が脳梗塞でお亡くなりになりました。享年81歳でした。

平成7年9月28日に萩原義一先生が突発性間質性肺炎でお亡くなりになりました。享年78歳でした。

平成8年1月8日に大塚良平先生が虚血性心疾患でお亡くなりになりました。享年73歳でした。

それぞれの先生に授業のこと、研究のこと、酒を飲みながら話したこと等色々な思い出があります。また、新しく代わりつつあるこれからの資源工学科の姿を見て頂こうとした矢先のことでしたので誠に残念です。あらためて御冥福を御祈りします。そこで、本会誌に書面の都合で十分には先生方の思い出等にはふれられませんが、先生方の思い出を掲載しました。

資源工学科の人事ですが、平成8年3月に岩崎孝教授が選定年で退職にともない、平成8年4月に探査工学部門に一名の先生を招聘し、資源科学部門（内田悦生教授、山崎淳助教授）、探査工学部門（毎熊輝記教授、野口康二教授）、開発工学部門（在原典男教授、森田信男教授）、原料工学部門（大和田秀二教授、原田種臣教授）及び環境工学部門（佐々木弘教授、名古屋俊士教授）の各部門で二名の教員体制で望むことになりました。明年原田先生の退職にともなう原料工学部門の後任人事が決まりますと、以後約10年間人事がなく、10人の先生によって研究、教育等が行われることになります。

それでは平成8年4月1日付けで新しく招聘しました先生を御紹介します。

探査工学部門を担当される毎熊輝記教授は、1963年3月早稲田大学第一理工学部資源工学科を卒業され、現在埼玉大学工学部専任講師です。専攻分野は応用地震学及び地盤工学です。

学部では、探査工学の基礎と測量実習（2年生）、探査工学B（3年生）、応用数学及び演習B（4年生）を、大学院では、防災探査工学及探査工学B演習を担当されます。

次に、資源工学会の皆様の御寄付により資源工学科独自に設立した資源工学会奨学金について話します。この奨学金の対象学生は、4年生です。本年度この奨学金に大きな動きがありましたので御礼かたがた紹介します。

平成7年3月現在会員の皆様の御協力によりまして資源工学会奨学金は、580万円までになりました。本年は、故萩原義一先生の御遺族より100万円、平成5年3月卒業しました武井義隆君のお父さんの武井平八様より50万円、昭和44年3月卒業しました赤川弘三様より100万円の御寄付をいただきました。特に、武井義隆君は、学生時代からカヌーを得意としており、卒業後、平成5年9月ヒマラヤのカヌー下りの折り、不幸にも事故に遭遇して帰らぬ人となり、御遺族のお気持ちとして資源工学会奨学金に御寄付を頂いたものです。

これによりまして資源工学会奨学金の総額が、830万円（平成8年3月現在）に成りました。当初の目標額は、本大学の奨学課が運営してくれる最低額である1000万円でした。最初、この目標額は遠い夢の数字とっておりましたが、皆様の協力により現実味のある額になりましたこと御礼申し上げます。引き続きの御協力よろしくお願い致します。

西田幾多郎の「続思索と体験」の中に、「偉大な思想家には必ず骨という様なものがある。大なる彫刻家に鑿（のみ）の骨、大なる画家には筆の骨があると同様である。骨のないような思想家の書は読むに足らない。」という趣旨のことが書かれています。

これからは、新カリキュラムの基、より強い骨のある資源工学科にするべく努力を惜しみませんが、この骨をより強固のものにするためには資源工学科卒業生の皆さんと共に力を合わせいくことが不可欠ですので、応援よろしくお願い致します。

## 以呂波仁保部止(最終講義に替えて)

岩崎 孝



岩崎 孝  
(いわさき たかし)

1929年4月27日、横浜市に生まれる。現住所：横浜市西区老松町38番地（本籍地も同じ）。

1953年3月、早稲田大学第一理工学部（現理工学部）鉱山学科（現資源工学科）を卒業。大学院工学研究科（現理工学研究科）修士、博士後期課程（1965年中退）を経て、1959年4月早稲田大学理工学部助手、1980年同助教授、1985年4月同教授、1996年3月31日、停年を選択し退職。

（その他の経歴）

1987年4月、熊本大学非常勤講師（1996.3まで）

1991年11月、通産省鉱山保安試験審査会会長（1995.11まで）

1992年7月、(社)資源素材学会理事、及び副会長（1996.3まで）

（その他の現職責等）

資源エネルギー庁採石災害防止技術委員会委員長、東京労働基準局粉塵対策指導員、関東通産局関東地方採石委員会副委員長、通産省環境立地局保安問題懇談会座長、日本学術会議資源開発工学研究連絡委員（1997.10まで）。

（表彰）

1995年5月18日 鉱山保安表彰（通産大臣）

” 5月19日 鉱山保安功労者表彰（鉱業労働災害防止協会）

” 5月23日 砕石技術功労者表彰（社団法人日本砕石協会）

私が鉱山の保安というものを当面の仕事にしようときめたのは、大学3年時における鉱山実習の体験からであった。鉱山学科（資源工学科の前身）に入学したものの、鉱山学という学問分野が、鉱業と如何なる係りがあるのか皆目見当がつかず、したがって学科の選択にあたっては、とにかく易しいところというのが、その最大の選択肢であったし、地層や岩石の生成は、遙か人力の及ぶべくもない世界の話にしか過ぎなかった。鉱物の結晶を学んでも、それが何の役に立つのかも判らなかったし、発破を掛けれ

ば、物が壊れるのは当たり前といった、まことに通俗的な発想しかなかった。要するに鉱業や鉱山の成り立ち、仕組みというものに対する社会の一般的感覚しか持ち合わせていなかったのである。

実習地端島坑は文字通り長崎県野母半島の西端北側に相対する小岩礁を、採掘や選炭によって生じた廃石類（ぼた。北海道などではずりと呼んでいた）で埋立て、これをコンクリート擁壁で囲んで造られた人工島にあった。その人工島には鉱山施設のほか、高層ビルのはしりとも

いうべき住居や、病院、学校まであり、一大コロニーを形成していた。またこれら施設と島本体のシルエットが、丁度軍艦のように見えるところから、軍艦島とも呼ばれていた。

炭層の最大傾斜70°、大深度、高温多湿、ガスや炭塵の発生も多く、機械化は困難という、当時としても最悪の作業環境でありながら、何故採掘が進められていたか。朝鮮戦争による特需ブームということもさることながら、わが国で数少ない製鉄用コークス原料炭の生産炭鉱という、必要かつ重要な地位にあったからである。

その端島で行われた炭壁注水実験を通じ、炭鉱の機能を十分に発揮するには、保安体制の整備、就中、炭塵・粉塵の制御が基本であると痛感、以後、粉塵-水-保安(安全)というキーワードが、私に研究(?)生活を行わしめることになった。

ところで、水と石炭との係りの中で、口惜しい思いをしたことがある。大学院時代であった。石炭化学の権威であったA博士(故人)が非常勤講師として大学に招聘され、私もその指導を受けることになった。ここで石炭試料の貯蔵方法として水中保存、試料調整のためには水中粉砕が基本であることを知る。ある日、現場から到着した塊炭を、広口瓶に収納すべく小塊に砕いて水と共に入れ、密栓して帰宅。翌日研究室へ来てみて驚いた。栓が飛び、瓶が割れて、床が水びたしである。A博士にこの事を報告すると、石炭から湧出したガスが、密栓によって逃げ場を失ったからと、直ちに原因を指摘していただいた。

考えの甘さを反省すると同時に、当時鉱山学の研究一分野を占めていた炭層ガスの評価に対する一手法として、この現象を逆用できないものか考えた。

試料を更に粉碎し、水と一緒にあり合せの瓶

に詰め、目盛をつけたガラス管をつないで置く。発生したガスの圧力で水がガラス管内に押し上げられて、やがて大気圧と平衡したところで止まる。ある物は激しく、またある物はだらだらと水を押し上げる。まさに10人十色である。これは妙だとその手作り器械(?)に、「石炭ガス湧出計」などと勝手に名付けて遊んでいた。

それから数ヶ月、何と専任のB講師(当時)は、同原理の本格的湧出計(という名称であったかは定かでない)を業者に造らせ、特許までとってしまったのである。以後彼は、その器械を持って炭鉱を廻り、データを学会誌等に発表、学位論文にも引用している。しかしそれらの成果に対する協力者として、私の名前はついに見当たらなかった。

安全第一という言葉(標語?)がある。しかし、危険や不利益を100%無くすることはできない。したがってはじめから安全を考えたならば、仕事をせぬにしくはなしである。柳に雪折れなしというが、それは柳が雪の積らぬ構造になっているからである。そのかわり、雪景色に柳は不釣合いというものだ。やはりここは「雨」が相応しい。

塵肺訴訟においては、企業の安全責任だけが指弾される傾向にある。作業場から粉塵を完全に除去できない。そこで補助対策として防塵マスクを着ける。ところがこれで100%塵肺を予防できるわけではない。マスクなど着けるのは、一人前の鉱夫でないといった觀念が、予防という安全の初歩的基本を見失わせたのである。耐震設計の見直しだけで、自然の破壊力を完全に防げるだろうか。地震の発生が予知できたとしても、災害を回避できるものではない。

危険は必ずあり、災害はその大小に拘わらず生じるものである。問題は如何に速やかに復元・復興するかであり、それらの方法や手段を考

えることも、また安全であり保安の領分である。とはいうものの研究成果の漏洩を予防する安全対策は、やはり「特許」しかないとは、いささか淋しい限りである。

1959年、論文もまとまらず、折角のガス湧出計も特許で攫われて、大学というもの、研究という仕事に厭気がさしていたとき、助手として採用する旨を学科主任から申し渡された。初任給1万2200円、同期生の当時平均月給は2万円程であったとはいえ、これは晴天の霹靂であった。

ところが反面、わが国の石炭産業界は、スクラップ・アンド・ビルド政策による挺入れも起死回生の妙薬とはならず、休廃止炭鉱は増える一方である。炭塵爆発の抑制を論文の主テーマとしていた者にとって、これでは生の実験場所を失う結果になる。教室の人事にも「空き」は当分望めない。助手給与はある年限（7年だったと思う）までで昇給ストップということで、お先まっ暗の状態であった。故中野教授と早大卒業の鉱業関係者を中心としたグループによって、骨材問題、特に碎石技術を扱う研究会組織を創ろうとする活動が始まったのは、1967～8年頃だったと思う。

そのグループが碎石に注目した理由は、国内の炭鉱をはじめ金属鉱山の相次ぐ閉山・廃山によって、特に採鉱関係技術を伝承し、さらに発展・改善の場として移転できると判断したこと、それまで骨材生産の主流であった河川砂利採取の規制により、碎石の骨材に占める比重が増大し（骨材総需要量約5億t、うち碎石は約1.5t）、離職技術者の受入れが期待できたこと、などであった。故中野教授は当時、鉱山関係企業はもちろん関係行政機関に絶大な発言力があって、技術者の処遇や、研究組織の必要性を斯界に訴えておられたが、一顧だにされなかったと、

のちに回顧されている。

1969年骨材資源工学会創立にあたって、その関係者は既成鉱業関係学協会から白眼視され、異端者呼ばわりされた。ともあれ、一度は石炭にのめり込んでいた人間である。これを石に乗り換えるには、いささかの躊躇があった。その優柔不断さが霧消したのは、「炭塵も岩石粉塵も同じだ」という故教授の一言であった。

その頃、石炭を石に乗り換えつつあった男がもう1人いた。彼の名前を仮にCとしておこう。Cはすでに某国立大学の助教授で、現在は当然教授、そしてこの3月、「正規の」停年を迎える。

関係学会の秋季大会が彼の地で開催されたとき、C助教授は準備会の反対を押切って「碎石技術部会」を取込んだ。来聴者約200人、大会本部が用意した予講集が足りなくなり、大慌ぎで増刷りし、会場を大教室に急速変更するという、学会始まって以来のハプニングとなった。

それから数年後、私は彼の大学の非常勤講師を嘱任され、粉塵問題を中心とした「開発環境保全工学」を講じることになる。しかし何といってもまだ助手の身分、そこでCは考えた。肩書きを「骨材資源工学会・技術部長」として、大学へ申請したのである。

早稲田・教務部の記録によれば、私の他大学非常勤講師就任は、助教授になった1980年からとなっている。これは要するに数年間の経歴詐欺になるから、問題が起これば当然処罰の対象になるはずである。些か心穏やかならざる思いはするが、反面、「門前の小僧、習わぬ経を読み」とは、また真であると感じ入っている。そしてとにかく、「石炭以後」も炭塵を捨てずにいられたのは、故中野教授の一言であり、C教授の策によるところ大きいと改めて思いを致しているこの頃である。

石灰石を除くわが国の鉱物資源産業の凋落は、

改めていうまでもない。いっぽう世界輸出総額の40%は、世界人工の3%であるわが国の輸入代金により賄われている、という。このことはまた、わが国による世界鉱物資源の買い漁りを意味する。それに資源輸入国の大部分が、いわゆる発展途上国であることも、周知の通りである。それら大恩ある途上諸国に、何をもって報いてきたであろうか。輸入資源はやがて円高によって高い「製品」になり、途上国に還元されることになる。かつて欧米先進国が植民地に対して行った「やらず、ぶったくり」の繰り返しだけが目立つのである。地下資源を安全に、早く、大量に、かつ安く生産する技術、いわば産業の初歩的基本技術を、わが国から移転するなどいったことは、電子時代のいまでは不要なのだろうか。

JAIKA、JATEC、国際資源大学校など、確かに発展途上国への技術開発や協力を行なう機関や体制は存在する。しかしその中味である教官や技術協力者は、鉱山学が大学から撤退し、鉱山や炭鉱がこの社会から消えると共にいなくなってしまう。だからその前に、国家資金を導入して幾つかの試験鉱山を残す。全国大学の数講座または数コースを、希望する日本人学生と、海外留学生を積極的に開放し、教育する場に改組して、試験鉱山で実習を行なう。以上が日本学術会議資源開発研究連絡委員として、同委員会に具申した私の意見概要である。

鉱山というものを、身をもって体験するのは都合よい位置にあるC教授在職の大学に、Dという若手研究者を預かっていただき研修させ、将来は鉱山学を継承する人間の1人として、わが資源工学科にその拠点を構築して貫うという夢は、いまはかなく消えた。本人はもちろん、私自身再び口惜しさを味わい、C教授はわが教室の資質に、露な不快感を示すところとなった。

最近の日本人、特に若い人の顔は、顎が細長くなったという。軟らかくて噛む手間の掛からない物を好み、人工砂糖水を常飲する所為だという。勞せずして得た繁栄と長い平和が原因だそうである。その代償が、基礎体力の低下に伴う持久力の不足となり、失敗を他人の責任にすぐ転化し、道理をつきとめもせず簡単に新しい物や事を受け入れる、という新風俗の構築をもたらした。手を汚し、汗を流す仕事を3Kとして忌避し、コンピュータやハイテク器械を解説書通りに、うまく使いこなすことだけを近代化と考えたがる傾向に、旧人類は戸惑いを覚えている。

こうした環境では、資源開発の基本は鉱山学だと叫んでも、負け犬の遠吠えにしか響かないかもしれない。しかし折から北海道のトンネル事故である。1万数千tと推定される巨岩の破壊に必要なさく孔数や装薬量の適格な推定は、鉱山屋でなければ、やはりできなかつたと思う。そして更にあの救出作業に、何故多くの自衛隊員が必要だったか。最終作業と予想される坑道内の、入り組んだ岩石土砂を取り明けるには、人の目と瞬間的な判断力、それに細かい手作業が必要である。しかしそうした作業のできる集団は、いまや自衛隊しか無いのでは、と思うことしきりである。

7人もの不法残留外国人が、拘置所から逃げ出した事件では、警報器が作業してはじめて、捜査活動に入ったという。巡視という初歩的基本動作を怠っていたこと、歴然である。

原子力発電「もんじゅ」のナトリウム流出は、温度計の破損が原因に違いないが、温度計ホルダを製作した某小メーカーは、渡されたものは設計図面だけで、ホルダに掛る風圧や耐熱度等の諸元は、全く知らされていなかったし、発注者である公社の人間すら、その事を気に掛けてい

なかった節がある。

直接、間接的に毎年かなりの予算が使われている気象庁、その予報的中率は、気象台開設当時からそれ程向上していないという。固定されたセンサでは、常にその限られた範囲の状況しか告知できないからである。目で見ても肌で感じたものを、観測結果に加味していた、昔の漁師のような「感」をもった予報官がいなくなったことに原因がありそうだ。そういえば近頃なぜか漁船の海難事故が多いと思うのは、単に気のせいだろうか。

物事の基本のことを「いろは」という。より多くの常識人を育成するために、寺子屋をはじめ戦後までの初等教育は、「読み、書き、そろばん（算盤）」をその基本としていた。そのうちの「読み、書き」を覚えさせるのに、11世紀初頭頃までは一部の識者だけが用いていた万葉仮名を、異なった音節にあたる平仮名としてすべて集め、涅槃經の四句の偈（ほめ歌。頌のこと）を意味する歌としたのが「いろは歌」である。いうまでもなく「いろは……」は、「以呂波……」

の草書体である。

わが国の伝統文化をも象徴するいろは全48文字ではあるが、「ゑ（恵）、エ（慧）」や「ゐ（為）、キ（井）」などは、いまでは使われていない。これは現代における発音が、古代と違ってきたからである。

言葉も常識も、時と共に変わる。多くの人を使うようになれば、それが正当化され、常識になる。このことを必ずしも否定するわけではないが、「元はこうだった」と考え直し、そのルーツを知ることによって、思考は充実し、固有の文化が伝承されるのではなかろうか。亡くなった司馬遼太郎さんは、しばしば日本文化の危機を嘆き、二十一世紀を「美しい終焉のとき」と念じておられた（産経、毎日新聞）。

鉱山学、鉱山保安学、そして資源工学に、美しい終焉をもたらして呉れる人は、果たしているだろうか。科学や技術の世界では「民はもとより勢に服す。よく義を壊しむこと少なし」（韓非子）であって、困るのである。



## 岩崎先生との出会い

金子 圭助

今年1月上旬に、在原教授より岩崎教授が3月を以て退職されるので資源工学会報に何か思い出を書いてほしいと連絡を受け、なんとなく承諾したものの、さて何を書くかと考えをめぐらしているうちに岩崎先生とはあまりにも長いお付き合いのため何から話して良いか迷い始めてしまった次第です。

十年一昔と言いますが、私が岩崎先生と親しくお付き合いを始めたのは今から40年も前になります。私の人生の半分以上の長いお付き合いです。そこで、私が大学4年の卒論の頃から昭和42に現在の骨材業界に入る迄と、骨材自然工学会設立当初から現在に至る迄に分けて、先生との思い出と、未来に向けて先生へのお願ひ事などについて述べたいと思います。

### ◎昭和30年から昭和41年迄

私が学部4年の昭和30年は、まだ石炭主流の時代でしたから、実習も卒論も石炭関係で行う学生が多く、私も故田中正男先生の研究室で、既に退職された山崎豊彦先生の指導で卒論の実験を行いました。その際大学院生だった岩崎先生に旧9号館の地下実験室で一年間実験の指導をうけたのが親しくお付き合いを始める最初のお付き合いでした（先生とはそれ依然から面識はありましたが）。

当時の就職状況は、石炭鉱山が不況になり、金属鉱山も斜陽のかげりが見え始めた時でしたが、鉱山学科の学生は割合のんびりしていて、若い岩崎先輩の実験室に集まり、いろいろな話題で連日語り合ったものでした。

卒業して社会へ出てから、仕事上で教えて頂

きたいことがあれば良く相談に行き、四方山話をして帰ったものです。お忙しい時間をさいて、面倒がらずよく相手をして下さったものと感謝しております。

### ◎昭和42年から現在

私が昭和42年8月より砕石工場の開発に係るようになってからは一段と先生とのお付き合いが多くなりました。特に早稲田大学で故中野実先生の肝入りで、故田中正男先生、故萩原義一先生、中井裕先生の大先輩の方々が、骨材資源工学会を昭和44年に設立され、若い岩崎先生が、炭じんの研究から岩石粉じんの研究に切り換えられて、今まで「粉じん」に対する知識が乏しかった骨材業界の社員達を講習会等で教育され、又砕石工場の「粉じん」発生状況の調査等を実施され、業界全般に「粉じん」「じん肺」の恐ろしさを植え付けられ、全体に「安全」に対する意識の高揚に努められました。

特に骨材資源工学会設立当初は、各地で講演会等を開催し、業界のレベルアップに大変な努力をされました。骨材資源工学会については、先生がご自身の著書「天の邪鬼萬歳」及び続編に触れていますが、設立当初から見ますと機構も発展的に改革されて、基礎産業を支える学会として成長してきており、現在、学会の三代目会長として活躍されている先生の双肩に将来の発展がかかっています。

◎先生の退職を聞いたとき、あまり驚かなかったのは以前より大学に選択定年制なるものがあり、何かの話のついでに「俺は65才になったら退職するぞ」と聞かされていたためかも知れま



せん。それにしても早稲田大学を誰よりも愛し、長い助手の時代（大学に教員の定員枠なるものがあるのを卒業して知りました。）に他の大学より声のかかった教授への道も頑固に断り続けて、後輩を育ててきた先生が退職を決意するまでには大変な悩みがあったことと思います。私など凡人には計り知れないことですが、余力をもって退職された後は、骨材資源工学会に力を入れて下さるとのこと、大いに期待しています。大先輩の先生方が先を見通して設立した「骨材資源工学会」を確実に力のある学会に築き上げて下さい。それを期待して応援する後輩達がいる

と同時に、関連業界の方々も支援して下さいとの確信しています。

本当に長い間「ワセダ」の岩崎教授、ご苦勞さまでした。最後に「お酒」の話題が一度も出ませんでした。これは岩崎研究室で育った若い卒業生にゆずることにして省かせて頂きます。

岩崎先生これからも体と奥様を大切にしながら後輩達のご指導をお願いします。まとまりのない事ばかり書きましたが、この辺で筆を置かせて頂きます。今後ともよろしく願い申し上げます。（昭和31年卒 関東鉱産）

## 結びの神！ 岩崎先生

緑川 宏

私が在学したのは昭和40年から44年まで。この時期、岩崎先生は助手でまだ授業は持たれていない。ピカソでいえば青の時代か。今思うに不遇の時であったのか。私の研究室は昨年9月逝去された萩原研。私の代が4年生になる直前に田中先生が亡くなられ、岩崎先生は田中研（萩原研の隣）の部屋で研究されていたので隣組。学生同志も一つの研究室といった雰囲気があった。この頃の思い出は良く飲んだことだ。卒論の実験もインスタントラーメンを実験台のコンロで暖めて食べたりしながら行っていたが、実験中に「おい！そろそろ飲もうや」と先生からもよく声がかかった。13階の同期の連中は酒好きが集まっていた。卒業の時に実験台の中は空いた酒ビンで埋まっていた。萩原研はいわばたまり場であった。オデンを囲んで集まりを行った時は12階から中野先生まで参加されて大いに盛り上がったことなどが思い出される。萩原研と田中研の連中は常連。岩崎先生も勿論である。

二次会で新宿に繰り出し、きらくやメゾンによく連れていってもらった。我が代も酒豪が何人かいたが、岩崎先生には飲み負けていた。実によく飲まれた。独特の愛嬌のある話しぶりで人を引き込んでしまう。我々も負けじと話は弾む。従って、毎日必ず飲み過ぎてしまう。そのような訳で学生時代は、先生から専門の勉強を教わった記憶はない。もっぱら酒の上での実学だった。それも先生というより良き先輩として。

ある時、岩崎先生が「日本人は毎日風呂に入って体を洗っているがそんな必要はない。」と独自の見解を披露された。それもそうだと思います。現在でも私は風呂に入っても体はめったに洗わない。考えるに恐ろしい程先生に影響されているようだ。

萩原研は私を含めて3人。他の二人、網倉氏、堀内氏は私より先に結婚した。結婚式や出産のお祝いには岩崎先生も常に顔を出された。そんなある時、先生は、「お前はまだ結婚しないのか。」

と私に聞かれた。「別に、いい人がいれば。」と答えると、「それなら俺が探してやる。」と言われた。その後しばらくして本当に先生から見合いの話が来た。先方から断られたり、私の方が気乗りがしなかったりで何回か話は流れた。確か5回目か。今の女房（後にも先にも一人だけ）の写真が送られてきた。気に入ってこちらはOK。先方もOKということで初めて見合いが成立。先生の地元横浜で見合いすることになったが、当日は台風が来て大荒れの天気。今日は中止にすると電話がくるだろうと思っていたがこない。時間が迫ってきたので仕方なく出かける。

会場のホテルの前の道路には水が溢れていた。私も女房もこれが初めての見合い。これが流れずにまとまった。岩崎先生は我が夫婦の縁結びの神である。この神様の光に導かれて喧嘩することもなく円満に過ごすことが出来ている。ひたすら感謝である。そして、先生の長女さんの漫画に私の息子が登場したり、奥様から絵画

展の案内を頂いたりと家族のお付き合いをさせて頂いている。

毎年正月、岩崎先生宅で新年会が行われている。大体は1月15日。今年も出席させて頂いた。皆勤賞である。毎年集まってくる人達も先生の一家あげての暖かい歓待に楽しい一時を過ごし、明日への活力を感じているのではないだろうか。昨年あたりから、何と私が後輩から長老と呼ばれるようになってしまった。先生の額の輝きには遠く及ばないが、少し近づいたせいであろうか。先生の輝きも年毎に増している。資源工学科をこの光でもっと包んでほしいと思うが、今年で退官されるという。定年まで在学してほしいと思うが言い出したら聞かない頑固さがある。残念なことではあるが仕方がない。これからはこの光の輝きを日本全体、いや世界に拡げていってほしいと思う。

ハッピーリタイアメント！

(昭和44年卒 ニチレキ)

## 我が師匠との思い出を語れば

坂井忠浩

「先生」と言う学生の呼び掛けに「先に生まれただけの馬鹿じゃない」とは何とも天の邪鬼な受け答えである。しかし、そこが我が師匠（最終的にこの呼称が承認された）、岩崎教授の魅力である。自らの信念にそぐわない俗世の流れには決して迎合することなく、人と酒と日本語と……そして何より資源工学科をこよなく愛する生き様に惹かれ、師と仰ぎ友と思う方々は少なくないと思われる。斯く言う私もその一人である。思えば師匠とは運命的な出会いを感じずにはいられない。差し詰め「赤い糸？で結ばれていた」とでも言うべきか、もう十五年も昔の話

である。

少々個人的な話になるが、私は1982年度から始まった理工学部への推薦入学制度の第1期生である。この制度は、学科が指定されて高校に募集が来る為、私は志望して資源工学科を受験したこととなる。選考方法は、簡単な小論文と面接であったが、その面接会場で初めて師匠と出会った。始めはひどく緊張していたが、師匠が高校の先輩と知って肩の力が一気に抜けたことを良く覚えている。そして、それが第一の偶然であった。斯くして無事入学を果たした私であったが、その年の学年担任が師匠であった。し

かも、師匠が初めて担任を持った学年であった。第二の偶然である。そして第三の偶然は、師匠が教授と成られた1985年度の研究室生が我々の代であったことである。

ところで、研究室での思い出と言えば、「和文タイプ」と「麦茶」と「夜の雑学講座」である。まず和文タイプであるが、これは師匠がワープロの文字が嫌いと言う理由で使い続ける逸品である。当時は「何であんな面倒臭そうな物を」と思っていたが、今ではパチンパチンと言う音の響きが妙に懐かしい気がしてならない。13階からあの和文タイプの音が聞こえなくなるのは、寂しい限りである。そして次に、夏場の麦茶作りが印象深く残っている。岩崎研と言えば師匠が年に一度腕を奮うカレーパーティが有名であるが、夏期限定の冷たい麦茶は幾人かのファンを持つ隠れた名物であった。その為、麦茶を切らさない様に三日と空けずエアコンのない蒸し暑い研究室に通い、師匠好みの旨い麦茶を造る為、勉強はそっちのけて煮出す時間や冷まし方など試行錯誤を重ねたものである。最後は誰もが思い出の一つに挙げられる夜の雑学講座である。御存知の通り、研究室は夕刻ともなると一軒の飲み屋と化した。特別旨い酒やつまみがある訳ではないが、そこの大將（師匠）に惹かれた人々が連日の様に集い賑わった。他の研究室生は勿論のこと、様々な卒業生が酒を片

手にその暖簾を潜った。そして、諺や語源、歴史をはじめ社会情勢や日本の行く末に至るまで、多彩な話題を取り留めもなく話した。酒量と共に師匠の駄洒落も数を増し、様々な方言がブレンドされた謎の岩崎弁で持論を展開される頃には、友と語り合うがごとく互いに賛同し反論し、時が経つのも忘れて酒と会話を楽しんだものである。

卒業後も夜の講義には良く参加させて頂いたが、師匠の知識の広さと深さそして物事を捕らえる視点には感服するばかりである。正に先に生まれただけの馬鹿じゃないのである。社会人となり自らの視野が広がる程、師匠の考えや行動により大きな感銘を受ける様になったことは事実である。特に資源開発に携わる者の立場で考え行動される姿に資源工学科教授の神髄を見る思いがした。

今回退職されるのはとても寂しいことであるが、今後資源開発に係る協会や学会活動に専念されるとのこと、まだまだお教え頂ける様である。師匠にはお体に十分気を付けて頂き、益々の御活躍をお願いすると共に、これからも多くの思い出を頂けるものと期待している。その意味でこの止めどない思い出話は「続く」とさせて頂きたい。

（昭和61年卒 新キャタピラー三菱）

## 岩崎先生へ

柴崎 剛

先生が辞められる、という報に接し「ああ本当に辞めるのか」というのが、偽らざる最初の感想です。というのも先生は我々が学生の頃から飲む度に辞める辞めるとうるさく、その度に

我々は相槌を打っていました。卒業後もお酒をご一緒する度におっしゃっていた為、これは完全に口癖に違いないと思込でおり、まあそうは言っても停年までは辞められないと思って

いたのです。しかしとうとうお辞めになると同い「ああ本当だったのだなあ」と思い、それと同時に「これは問題だなあ」と思ってきました。大体岩崎研が学校に遊びに行っても無いという事は重大な問題です。あの岩研での先生の意味不明な罵倒の様な激励の様な酔いどれ言葉も、いざ聞けないとなるとこれはこれで問題に思えてきます。まあしかし現実に辞められるという事ですので問題は私には解決不可能です。仕方ありません。それはあきらめるとして、たまたま寄せ書きをという御下命も頂きましたので先生との思い出と私の頼みを書きつづりたいと思います。先生との思い出を思い出すに当たり、私の様な大学4年間の内1年間だけ岩研にお世話になりかつ資源工学の勉強をまじめにしている学生にとっては直ぐに「酒」と「釣り」の2つの言葉が浮かんできます。その事についてズラズラと書いてみます。

【酒】我々の時代の岩研は多くの資源の研究室がそうであった様に酒まみれでした。研究室には酒の空びんがたくさん転がり、その中で時に貧乏な時に贅沢なつまみで酒を飲んでいました。先生は、

「酒さえ飲めれば社会に出てもやっていける」などと自分を正当化をする様な訳の判らない理屈をはきながら我々と酒を飲み、我々も我々で「要は酒だ。酒はサントリーよりもニッカ!!」とこれまた訳の分からないこをのたまひ、ただひたすら酒を飲んでいました。岩研からの帰り道は、多くの先輩そして後輩がそうであった様が大変でした。

また「山中智晴」という悪い人がいて、我々の知らぬ間にある資源の女性とディズニーランドに行き結婚をするというスキャンダルを起こしたのもあの頃でした。とにかく酒をよく飲み楽しい日々でした。

【釣り】我々平成元年度卒業組は卒業旅行に釣りに行ったことを含め数回釣りに出かけました。平成元年夏に木更津にキスを釣りに連れて行かれた事があります。私は生まれて初めての釣りでした。その時釣ったキスをバケツに入れておいたのですが、そのキスが死んだ為、私は死んだら仕方がないと思い海に捨てた事があります。その時先生は酒を飲みながら私を罵倒していました。また真鍋君（現東洋信託）が船に乗った瞬間船酔いをしてしまい、先生は船酔いするなら酒酔いをしろ、などと勝手に理屈で酒を飲ませ、激しく吐かせ立ち直れなくして楽しんでいました。（その為真鍋君は最後まで海釣り企画には消極的でした。）

文字に限りがありますので、思い出はここまでにして（本当は卒論の思い出やら授業の思い出やらも書くべきですが、あまり覚えていませんので割愛させていただきます）、最後に頼みを少々。

先生はこれからも、早稲田を辞めようが何しようが、我々の先生であり続けることは変わりません。今後何をするかは別にして、これからも一日も長く、吠え続け飲み続け釣り続ける姿を我々に見せていて下さい。それは我々の大学時代の楽しかった日々の現在進行形の一つなのです。

最後に末永く奥様と仲良くなさって下さい。一応お疲れ様でした。また飲みましょう。

（平成二年卒 神戸製鋼所）



## 「エンジニア」としてのはじまり

小栗 健

この度、岩崎先生が古稀を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。しかし、お世話になった先生が教壇を下りられることは誠に残念でなりません。なぜなら、私が研究室でお世話になっている頃から、岩崎先生が選択定年を希望されていたという事実があったからです。とうとうこの時が来たことを、大変寂しく実感しております。私が岩崎先生にお世話になったのは、たった1年という短い間でしたが、その時の岩崎研究室での思い出を綴っていきたいと思います。

私が岩崎研究室に入室した平成3年はバブル真っ盛りの中で、私と同じく岩崎研究室に入室した同期は8名でした。当時は現在のように超々氷河期などと呼ばれる就職難時代ではなく、売り手市場の恵まれた環境で、その甘えもあってか、私も含めて同期らは、先生に大変ご迷惑をかけ、お世話になりっぱなしだったように思います。

岩崎研究室は、開発・環境工学を専門とする研究室であり、研究テーマでは「産業廃棄物の細骨材としての利用法」について先生にいろいろご指導いただきました。先生は採掘、破碎などの作業に伴い発生する粉塵の制御法や発破に関する技術等について専門に研究されており、骨材資源工学会代表、(財)資源・素材学会副会長等、重要なポストを任務され、日本資源界においてその実績、信頼は絶大であったと聞いております。

私は同期の中で最もお世話になった1人だと思いますが、それは卒論のテーマで直接岩崎先生に御指導いただくことになったからでした。

それでも、夏休み前にはほとんど研究室には行った記憶がなく、実際には卒論提出が迫る3ヶ月位前から通い出したというありきまで、先生の的確なご指導があったからこそ無事卒業できたと感謝しております。まして企業との共同研究をテーマとしている同室のものは、研究室に足を運ぶことは少なかったようですが、皆無事に卒業できたのもやはり先生のご指導があったからでしょう。

当時、大変恐縮なのですが、岩崎研といえば“お酒”と“釣り”研だというイメージが定着していたようで、研究室の選択時にはこの様な噂がかなり流れていたように記憶しております。だからといって特に酒好きや釣りキチが入室したわけではないのですが……。

我々の先輩方の頃は、岩崎先生との良きコミュニケーションの場として、飲み会や釣りが頻繁に開催され、先生から数々の貴重なお話やアドバイスを頂いたと聴いておりますが、私たちはそのような先生との大切なコミュニケーションの場が非常に少なく、今となってはそのことが非常に悔やまれてしかたありません。

ただ、そうした僅かな先生とのコミュニケーションの中で、私は生涯忘れられない教訓を得ることができ、大変感謝していることがあります。それは、まだ暑い9月下旬に、研究室で先生とお酒を飲んでいる時のことでした。先生が「“サイエンティスト”と“エンジニア”の違いとは一体、何なのか？」という質問をされたのです。そのまま日本語に訳してしまえば、サイエンテ

イストは科学者であり、エンジニアは技術者なのですが、特に知識のない私はその字の通り、科学者は科学的な理論に基づき自然現象を解明する職に携わる人、技術者は技能を生かした職に携わる人と答え、それ以上の答えは思いつきませんでした。この質問は、ちょうどメーカーに就職が決まっていた私には特に考えさせられるものでした。先生がその時おっしゃった言葉は、「サイエンティストは自然怪奇な現象を数学・科学的な理論にもとづいて解明することが目的であり、直接的に人に役立つことまでは目的としていない。しかし、エンジニアは持っている技術を人のためになるように工夫し、人のためになるものを開発していくことが目的であり、人のためになって初めて良き技術者と言える。お主らは工学の道を進んできたのであって、理学を学んできたのではない。」というものでした。確かに「技術」の定義は、広辞苑にも上記のように記述されておりますが、技術の定義について認識のなかった私には、この基本的かつ本質的な意味が全然分かっていなかったのです。この言葉は先生が近年の学生に対する危機感を如実に表したものだだと思います。私は就職先としてメーカーを望んでいたのですが、単に物作りが好きだからという安易な考えを持っていなかったこと、そして同室の8人のうち半分以上はいわゆる金融、商社など文系就職を望んでおり、エンジニアとしての道を進むものが少なかったことが、エンジニアを育てるという先生の思想からかなり反していたんだと思います。そのような理由から、他の研究室と比べて岩崎研究室は先生と生徒とのディベートが多かったと思います。また、卒論もワープロの使用は不可、大学院生はとらない、といった先生の考え方も、我々生徒には受け入れられるものではなかったというのも原因でした。私が卒業してか

ら先生が送って下さった「天の邪鬼 萬歳」(岩崎 孝著、1994.5.15発行)を読まさせていただき、はじめて先生の考え方が理解できたというのが実状でした。(…、何でもやってみよう、というハングリー精神を忘れ、コンピューターだけが近代科学の唯一無二の手段と錯覚している風潮に対しては、… (p.199、鉄道唱歌より抜粋))

一方で、このような対立(少々大きさであるが)が先生の気持ちを徐々に固めていったのではないかと考えると心傷みます。

まだ遊びたいから学生を続けようとするもの、ろくに漢字も書けない、言葉の意味も知らないのにワープロに頼ろうとする我々に対する先生の教育がその時理解できていれば、社会人になった今、こんなに苦勞することはなかったと思います。

私は研究所に配属され、水回り、街などに快適な空間を提案していく研究・開発の仕事に携わっておりますが、特にこの「人間生活に役立つ技術開発」という先生の言葉が1つのテーマを手掛ける度に強く思い起こされます。専門分野の講義で学んだことは、直接的には仕事に反映されるものではありませんが、研究室で先生とのつきあいを通して学んだものは、これから先もずっと役に立つものだ実感しています。私の所属する会社では、社員全員が「お客様が真に満足できる商品」を開発するよう意識づけを行っておりますが、コストや製造方法などあらゆる制約を受けていくと、いつの間にか独りよがりの商品開発、技術者が満足するだけの商品になってしまうことがしばしば身受けられます。確かにエンジニアの本質を意識しながら仕事に取り組まれている方も多いと思いますが、大半のエンジニアは常時意識し続けてはいないように思われるのです。この当たり前の本質を

強く認識できたことは、今後の私のエンジニアとしての生き方に大きな影響を及ぼしていくと思います。

また、学問を離れれば大変気さくな先生で、特に女性生徒には人気があり、「がんちゃん」という愛称で親しまれていました。日が沈む頃になると飲み会が始まり、隣の研究室からも生徒が集まって、大変にぎやかな研究室でした。お酒の入った先生の話は駄洒落や昔話が多かったと記憶しておりますが、大変おもしろく、興味深く聞かせていただきました。そのセンスは大変素晴らしく、前記いたしました「天の邪鬼萬歳」にもたくさん記載されており、本を読む度にその感性がなつかしく思い起こされます。また、会社が海に近いこともあって、上司らと共に海釣りに出かける機会が多いため、私は川釣り専門で海釣りは全くの素人です。1度だけ研究室で海釣りを企画しまして、先生にいろいろ教えていただいたのですが、船に弱い私はただひたすら、海に撒き餌をした記憶し

が残っておりません。もっと海釣りに出かけて、先生に御指導願っていただくとつくづく思います。その時は、日もよく大漁だったと記憶しておりますが、それ以来、なかなか大漁と呼べる釣りをしたことがありません。是非、東京湾で先生と一緒にさせていただきたいと思っております。

最後になりましたが、資源工学という専門に余り縛られることなく、自由に勉学するチャンスを与えていただいた岩崎研究室での日々は、今から思えば好奇心を育て、幅広い視野を身につけられた貴重な時代であったと感謝しております。先生が与えて下さった数々の教訓をこれから先の人生に思う存分、応用していきたいと考えております。末筆ではありますが、これまでの教育・研究活動に対するご尽力に対して御慰労申し上げるとともに、岩崎先生の今後のご健勝とご活躍をお祈り申し上げたいと思います。そして、今後とも引き続き御指導賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

(平成4年卒 INAX)

## 岩崎研での思い出

西川 総明

私は、岩崎先生との思い出は研究を通してというよりも会社でいうアフタ5のお付き合いの方が多かったような気がします。実際、私は先生の紹介で鉄道総合研究所の立松さんと佐々木さん、前田建設技術研究所の石田さんのもとで卒論を書いたため、研究室に顔を出したのは配属されてからの数ヶ月とその後は週に一回程度卒論の経過を報告しに行った時だけでした。ただ、確かに研究室を訪ねる回数は少なかったのですが、先生から授かったものは非常に多かったと思います。

まず、岩崎先生に教えて頂いたお酒の飲み方についてお話したいと思います。先生との思い出を書く際、これは避けて通ることのできないことのような気がしますので…。

どのようなことを行うにしても人にはそれぞれ個性がありますが先生のお酒の召し上がり方は非常に個性的で、先生に会うまでは自分の飲み方も個性的であると思っていたのですが、自分は普通の人なんだと思わせるような凄みがありました。その場での話題は多岐にわたっており、その場に居合わせた面々の身の上話から学



間に関することまでありました。現在思い出してみますと、教室で教わったことで頭に残っていることは皆無に近い状態なのですが、不思議と先生と酒を酌み交わしていた時に話したことは鮮明に甦ってきます。特に覚えていることに、よく先生に理学と工学の違いは何かと問われたことがあります。その時私が答えていたことは考えてみますと今では非常に恥ずかしくなるような答えですが四年間のエンジニア生活を通した今でさえはっきりとした答えは見出しにくいような気がします。ただ、師匠にあたる人とこのような形で自由な発想で議論させていただいたという体験は、アラビヤやベトナムで多種にわたる人種、および360度海に囲まれ閉じられた現場での仕事に非常に役に立っているような気がしてなりません。特に私の貧弱な英語力で人に理解してもらうにはこのようなコミュニケーションのやり方は非常に役に立つと思います。ただ、職場でお酒はご法度なのでコーヒを片手にですが。

次に、先生の大好きな釣りについてお話しし

たいと思います。先生の釣り好きは有名で私も一度伊豆に連れて行っていただいたことがあります。たまたま、その時私が幹事をやらせて頂き、楽しい思い出となりました。その時は船釣りで伊東の街から沖に出ました。前日、宿泊所で皆と酒を酌み交わした後に、朝早かったので私は四時過ぎに起き皆を起こして回ったのですが、先生が目を閉じられて高校時代に作曲した歌をお歌いになっていたのを覚えています。その時は大漁で釣りを終えた後、皆で釣った魚を料理し新鮮な魚を食べ楽しんだのを覚えています。ただ、先生は酒瓶をお放しにならなかった気がします。

末筆ではありますが、先生のこれまでの教育、研究活動に対するご尽力に対しご慰労を申し上げ、さらに先生ご夫妻の末永いご健康とお幸せをお祈りいたしまして、筆を置かせていただきます。(平成四年卒 アラビア石油)

## 愛すべき岩ちゃんへの……ラヴ♡レター

三宅 弘子

### 前略

早稲田大学に入学した年、平成元年。あれからもう7年です、先生。まだ私も、少女のあどけなさの残った田舎っぺでした。随分、大人になったでしょう？私がちょっぴり成長した分だけ、先生もお年を召されましたね。花の都、東京での一人暮らし、女子大生。資源工学科に入学して生涯の親友と出会って……素敵に大学生活を夢みて上京して、いざふさを開けてみれば同期の女子学生は私ただひとり。少々、不安の

よぎる大学生生活が始まった頃、資源工学科オリエンテーション。ここで、資源の学生としての洗礼を受けるんですね。当時の学科主任は原田先生、そして私の担任は岩崎先生でした。私の年は追分セミナーハウスに行く前に東邦亜鉛精練所での工場見学に行きました。理工学部に集合し、貸切りバスに乗りいざ、東邦亜鉛へ出発したと思ったら、岩崎先生はお酒飲み始めちゃって、まだ、ウブだった私達あぜん……。いいの先生？？こりゃすごい先生だわ。という不



安、いや、期待はやっばり的中して、セミナーハウス内での懇親会ではすごかったんですね。ハンパじゃない飲み方。諸先輩方には、岩ちゃんはちょっとエッチで、おしり触ったりするから気を付けてね。なんて聞いているそばからパンツ脱いじゃった岩崎先生……赤面。これぞ、ウワサに名高い名物教授、岩崎孝。一瞬で、我らに印象づけてしまった。後に知ったことですが、そんなことは序の口だったということ。それがきっかけかどうか、7年たった今でも岩崎先生のファンなのです。先生の大らかさ、豪快さ、人を引きつけてしまう話、学生といつもいっしょの高さで話を聞いて下さるところが学生に安心感を持たせるのでしょうか。それとも、あの有名な、光輝く頭から特殊なフェロモンを放出しているのでしょうか。夕方、OBがいらっしゃれば、そうでなくても4時半とは言いませんが、一緒にお酒を酌み交わして下さる先生。ちょっとエッチな替え歌もあれば、まじめに言葉の由来を話して下さったり、駄洒落、政治・経済に至るまでの幅広い話は尽きません。酔うと必ず出てくる“ぬしゃ〜”のフレーズ。次に出てくる言葉を容易に想像できても、誰がそれを止めることができましょう。“あっ、きたきた、岩崎先生変わってないね。”こんな言葉を聞きにOBが、学生が、集まるのでしょうか。飲みすぎた後の千鳥足も、車とケンカしてしまう先生も、やっぱり温かい人なつつこさを感じてしまう。女子会では鼻の下のばしているけど、でも人気者の岩崎先生。実験に行きづまったとき、悩んでいるとき、疲れているとき、私たちは、岩崎研のドアを開け、傷ついた羽をいっとき休めるんです。そしてまた、先生に元気づけられ新しい気持ちになってそれぞれの世界に戻っていきます。かく言う私も、岩崎先生に愚痴ってしまい、助けられる一人ですけれども。いった

いどれほどの学生が、私を含め先生に勇気づけられたことでしょう。

本当に長い間どうもご苦労さまでした。きっと、社会人になったらスーパーニッカ持って先生を訪ねます。どうぞ、まだまだ未熟者の私をいつものようにあの口調で叱って、そしていっしょに飲んで下さい。そして、当時は言えなかったいろんな話、朝までしましょうよ。自分で省みても、とても立派な学生であったとは思いませんけれども、楽しい大学生活でありました。先生のおかげで。先生でいて、先生らしくなく（ごめんなさい！）いつも、岩崎先生なんてめったに呼ばなくて、“がんちゃん”って気安く呼ばせていただいて、あの“つるつる”をあいさつがわりになでてました。

先生の顔見てたら、きっとはずかしくて言えないから、書面を借りて……

「岩崎先生、どうもありがとう。先生大好きです。これからも、ずっと、我等のがんちゃんदैて下さい。がんちゃんは、がんちゃんだからがんちゃんなんです。」

“酒は飲んでも飲まれるな”ですよ!! それでは、お元気で……。かしこ

(平成5年卒 早稲田大学博士課程)



## 岩崎研 “特別講義”

佐野 智

私が初めて岩崎先生とお酒を飲んだのは、追分セミナーハウスでの新入先オリエンテーションであったと思います。とにかくよく飲み、その日のありさまは先生を御存知の方なら想像がつくでしょう。こんな大学教授もいるのだと驚いた記憶があります。その三年後、研究室を選ぶにあたり、“酒をよく飲む”という条件をクリアし、私は迷わず岩崎研を希望しました。

私は四年時、勸鉄道総合技術研究所で卒論のお世話をさせていただきましたので岩崎研へ通うのは週一回程度でした。今となっては週一回通う夜の“特別講義”が思い出深いものとなっています。特別講義とはもちろん勉強ではなく、先生を囲んでの飲みのことです。先生の人柄からか、他の研究室からも人が集まり、皆で遅くまで騒いだものです。先生はスーパーニッカがお好きで、今も酒屋でそれを見るたびそのころを懐かしんでおります。また岩崎研では毎年、釣りが必修科目となっており、学生はもちろん多くのOBの方が参加しておられました。東京湾でビールを飲みながら釣りをするのは、卒論のことも忘れ爽快です。今後もこの企画は長く続いてゆくことでしょう。この年、岩崎研での一番のイベントといえば、全員参加しての韓国旅行です。八月に一行はソウルに向けて出発し、約一週間の行程で韓国を周遊しました。韓国では釜山、研究施設の視察に加え、現地の大学生と交流する機会を与您いただき感慨深いものとなりました。卒論では、ワープロで原稿を書くことが当たり前となっている今、先生はペンで文章を書くことを指導しておられました。卒

論に関してはその内容よりも先生に文章を直していただいたことばかり印象に残っています。社会人になり、文章を書くことが増えるにつれ、先生に御指導いただいたことを感謝しております。

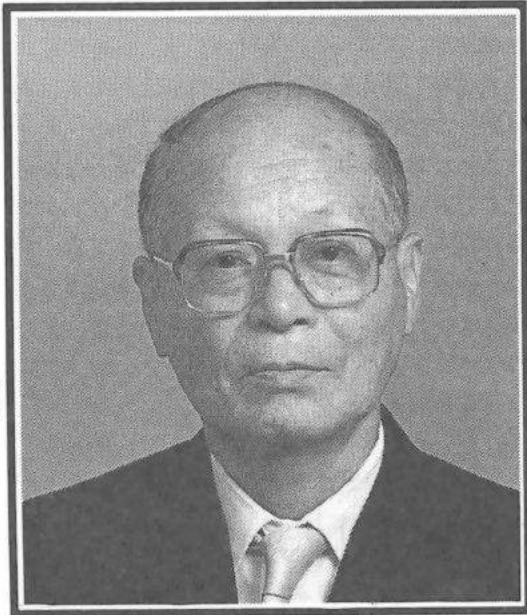
現在、私は広島ガス㈱に勤務し、工場ですべて都市ガスの製造に携わっております。工場の操業に関しては、資源工学は直接結びつきませんが、将来は都市ガスの原料であるLNGやLPGについて考えてゆきたいと思います。当社では、今年三月インドネシアよりタンカーにてLNGの輸入を開始いたします。今後岩崎先生をはじめ多くの卒業生の方にお世話になるかと思っております。

今思えば、岩崎研では特別講義が多くあまり勉強をした記憶がありません。(すみません)。しかし、私は岩崎研での一年を通して、広く資源工学に対する興味、好奇心を育てていただいた気がします。ガス業界に就職して二年が過ぎた今、資源工学科を卒業したことを誇りに思い、岩崎先生に指導していただいたことを感謝しております。ありがとうございました。

最後に岩崎先生のこれからの御活躍をお祈りいたします。またいつか一緒に飲める日を楽しみにしております。くれぐれも飲み過ぎないように、お体を大切に。

(平成六年卒 広島ガス)

# 追悼 伏見 弘先生を悼む



## 伏見 弘先生経歴

伏見弘（ふしみひろむ）：大正2年10月13日東京に生まれる。京華中学校、第一早稲田高等学院を経て昭和13年3月早稲田大学理工学部採鉱冶金学科卒業。三菱鉱業納入社後、昭和14年入隊、陸軍航空技術将校として燃料廠に勤務、各地を転戦し仏印サイゴンにおいて終戦。昭和21年4月内地帰還、一時会社に復職後昭和22年退社。昭和23年早稲田大学専門部工科非常勤講師、同25年理工学部専任講師。同27年助教教授、同33年教授、同59年定年退職。平成7年6月15日逝去。昭和37年工学博士。この間学内においては、資源工学科主任、体操部部长、健康保険組合理事長、大学商議員等を、また学外では、日本アイソトープ協会放射線同位元素工業利用委員会常任委員、日本選炭協議会評議員、日本鉱業会理事、科学技術庁資源調査会専門委員、浮選研究会副会長等を歴任。

## 弔 辞

富士通ビジネスシステム

杉 浦 稔

(昭和36年卒業)

伏見先生、謹んで先生にお別れのご挨拶を申し上げます。

先生の傘寿のお祝いが、まだつい先だったの様な気がして「お亡くなりになった」とはとても実感が湧いて参りません。

私たちが先生の教えを受けたのは昭和32年、朝鮮動乱の傷あとがやっと癒えて、全学連の闘争の始まった頃でした。

9号館の研究室、白衣を着た先生の選鉱学の授業、蛍光灯の下であの独特な書体で書いて下さった紹介状。夏休みの間中山のなかで測定をした熱川・鹿沢での温泉さがしの日々。思い出は限りなく有ります。

新鹿沢の井戸から温泉が出たと聞き、狂気のように喜んだのもつい先だったの様に思い出します。

高田馬場のトリスパーの階段の下の席で、水

割りで議論をしました。ときには軍隊の話をしてくださいました。雪の中の訓練の話でした。

今思い出せば、先生の「最終講義」の日も「傘寿のお祝い」の日も共に大雪でした。

傘寿のお祝いは奥様と一緒に喜んで頂きました。お送りした時格子戸が開かない程積もって居ましたね。

あの丸い眼鏡の優しい笑顔で、とつとつとしたお話ぶりが浮かんで参ります。

先生はお忙しい中で時間を作り、ご自分で資源の探査のために山を歩き、また、企業ご出身の先生は、ひまを見ては企業を歩き、新しいテーマを探しておられました。

そして先生は常にアイデアをお持ちでした。

ラジオアイソトープを使つてのスラリー濃度の測定や、ボールミルのボールの軌跡調査は、「斬新な考え方」だったと思います。

間接的な濃度の測定は今では常識ですが、当時としては正に「斬新」でした。

ガソリンと水の乳化燃料は、石油危機時代のアイデアでした。

また、先生は「資源はエネルギーである」とよく言っておられました。

先生のアイデアに満ちた勢力的な行動力、常に前向きの姿勢には、私たちは少なからぬ感銘を受けました。

先生御夫婦にお仲人をお願いした者は、もう孫を持つようになりました。

皆、もうすぐお爺ちゃんになります。

正に先生は、採鉱冶金から鉱山科へ、そして

鉱山科から資源工学科への時代転換を生きられ、見事に「昭和に人生」を作られました。私たちは二十世紀を全うします。そして二十一世紀へ繋ぎます。

伏見先生、安らかにお休み下さい。本当に有り難うございました。

みんな来ておりますよ。今日間に合わなかった者たちは、サンパウロ、シドニー、ヴァンクーヴァー、そしてジュッセルドルフからも、皆お礼を申し上げます。そして、卒業以来欠かさず続けているクラス会で先生のご遺徳をしのび思い出話に花を咲かせます。

どうか静かにお休み下さい。

## 伏見弘先生のご逝去を悼んで

資源総合システム

一 木 修

(55年修士修了)

58年博士退学)

伏見先生 私は今、先生の御霊前に佇み、ここにお別れのご挨拶を申し上げます。

三年前、私学会館で先生の傘寿のお祝いの会が開かれ、先生はとりわけお元気で楽しそうに談笑されておられました。「先生、御無沙汰しております。」と、資源工学会の席で再びお会いできるかと思っておりましたが、傘寿の会が先生のお元気な姿にお目にかかれる最後の機会になろうとは夢にも思っておりませんでした。あのひと時は先生にお目にかかれるだけでなく、諸先輩、後輩、同期が一同に会することのできるいい機会となりまして皆感謝しております。

私は先生が早稲田大学理工学部資源工学科を退官される一年前までの七年間を伏見研究室に所属し、公私に亘り多くの助言と御指導をいただきました。私は大学三年の時にはもう伏見研究室に通うようになり、それ以来博士課程が終了するまで長くて短い七年間でしたが、私の人生の進路を決定する大事な時代を伏見研究室で

過ごすことができました。その間に私はたくさん重要な事を学び、また多くの思い出を作る事ができました。

先生は何に対しても御興味を持たれ卓越したアイデアと知恵により幅広い分野の研究を手がけられました。私が伏見研究室に在籍中は先生の研究のお手伝いとして山梨県西湖にて温泉源発見のための調査、甲府市にて電気探査を用いた武田信玄侯の埋蔵金調査、北海道赤平市住友石炭にて放射能探査を用いた炭坑調査、群馬県にて鉱山廃水処理調査等、日本各地を回ることができました。また公害対策として自動車の排気ガスを抑制するガソリンに水を混ぜた加水ガソリンの研究もありました。水の代わりにオレンジジュースを混ぜると効果はさらに上がり町中がオレンジの香りがして一石二鳥という夢のある研究でした。どれをとっても今となっては懐かしい思い出となっております。

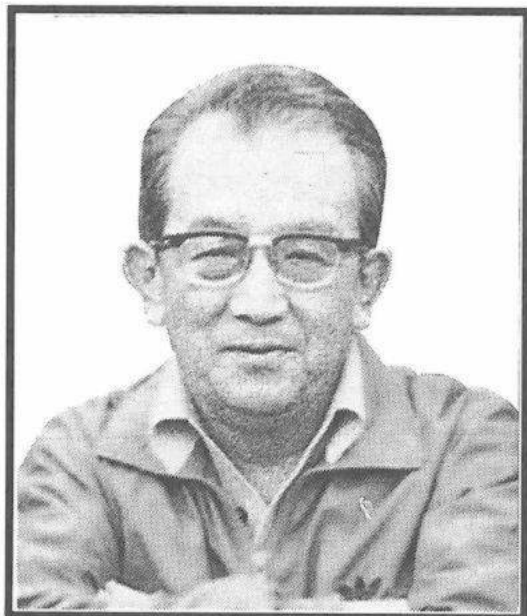
私は先生が六十歳を過ぎてからの弟子ではあ

りますが、先生の気持ちはたいへん若く柔軟な発想とチャレンジ精神をお持ちでした。当時の研究室の雰囲気は学生の自主性を重んじ、自由な空気があふれておりました。先生は学生の考えに良く耳を傾け、新しい芽を育てる御指導は天下一品でした。私が博士課程に進学し資源経済という新しい分野に取り組みたいと相談した時もその分野は日本でもこれからは重要になるからということ深い理解を示していただきました。本来なら自分とは分野が違うということ断られるところでしたが、本当にありがとうございました。

私が伏見研究室に在籍している間には先生の人柄を慕って多くの学生が毎年集まってまいりました。こうした学生は今では中堅社員として皆それぞれ活躍しており全国に散らばっております。我々先生の門下生は早稲田大学理工学部資源工学科伏見研究室の出身者であることに誇りを持ち、これからも社会に貢献していきますので天上より安心して見ていてください。先生が亡くなられても先生から学んだ柔軟な発想とチャレンジ精神は我々の心に生き続けます。

伏見先生、御冥福を心からお祈りいたします。長い間本当に御苦勞様でした。安らかにお眠りください。

## 追悼 萩原義一先生を悼む



### 萩原義一先生略歴

萩原義一（はぎわらよしかず）：大正6年7月（1917年）東京に生まれる。昭和17年6月（1942年）早稲田大学理工学部採鉱冶金学科第一分科在学中に学徒応召（同年9月卒業）、同19年7月（1944年）陸軍少尉任官。昭和23年早稲田大学理工学部採鉱冶金学科鉱山保安研究室研究員として勤務。同24年同学助手、同27年早稲田大学第一及び第二理工学部専任講師、助教授、教授（昭和43年、第二理工学部の廃止）を経て昭和63年（1988年）3月、早稲田大学を定年退職、同年4月同学名誉教授。平成7年9月28日逝去、昭和34年さく岩粉じんに係わる研究業績により工学博士。政府関係審議会等：石炭鉱業調査団専門委員、通産省石炭鉱業審議会技術部会委員、中央鉱山保安協議会委員、保安調査団団員、骨材対策委員会委員、砕石災害防止技術委員及び委員長、労働省じん肺審議会専門委員、粉じん対策指導委員。団体委員等：全国炭鉱技術会委員、骨材資源工学会会長、日本学術会議資源開発工学研究連絡会委員、石炭技術研究所専門委員会委員。表彰等：労働大臣功績賞、同功労賞、通産省鉱山保安功労賞表彰。

## 萩原義一教授のご逝去を悼む

早稲田大学教授（理工学部）

岩崎 孝

私と先生との出会いは、1951年の7月、鉱山学科（当時）3年生の夏であった。1950年に始まった朝鮮戦争が、38度線付近で膠着状態になった頃である。その一方、同戦争の勃発は、敗戦で物質的精神的に疲弊し切った日本の産業、特に鉱業とその関係者に大きな活力を与えた。いわゆる特需景気である。中でも石炭鉱業は敗戦当時の年間出炭量2200万tから4600万t台に回復（史上最高は1940年の5632万t）したこともあって、将来の就職先について、他学科生から羨しがられたものである。

その頃、現在の工場実習は「鉱山」実習であり、しかも必修であった。さらに実習そのものも今のような見学記程度では駄目で、鉱山の全容を把握してレポートとすることが義務づけられていたので、予備知識を仕入れて置かねばならない。だいいち、何処にどのような鉱山があ

るか判らなくては話にならぬ。そこで先生方に、恐る恐るお伺いを立てることになる。私の場合その窓口が、シベリア抑留から帰還されたばかりの萩原先生であった。確か、「教務補助」という、現在の助手に相当する職責だったと思う。

かくして私の実習も、その期間の前半を、炭鉱の新防じん技術として輸入されたばかりの炭壁注水、その実験を長崎港外の人工島・端島<sup>はしよ</sup>で行うことにしている房村先生（現名誉教授）と故人の両先生の手伝いをする、ということで、どうやら実現することができた。

炭壁注水などといっても、廃講となった開発工学を受講できぬ学生にとっては、何のこともわからないであろう。採炭に掛かる前に、その炭層に高圧水を注入しておき、採掘によって発生する浮遊炭じん量を抑止する技法である。当然浮遊炭じんの測定が必要になる。その炭じん

の測定も、当時は計数法といって、浮遊粉じんを高速・瞬間吸引してデッキグラスに吹付け、付着した粉じんの粒子数を、顕微鏡下で数える方式である。数を数えるには、あの「カチカチ」と音のする数取器が用いられた。

ところがこの器械、小形ではあるが音は妙に気になるものである。先生方の「助手」ということで、米客用の豪華(?)な一室が宿舍としてあてがわれたのは幸運であったが、襖一枚隣部屋から夜中過ぎまで両先生の使う数取器の音に、悩まされる羽目になった。

わが国鉱業界は、戦後急速、かつ大きく変革した。その方向付けをしたのが1949年公布の鉱山保安法であり、石油との競合に一縷の望みを掛けたのが、第一次石炭政策遂行の中核となった石炭鉱業調査団答申による、スクラップ・アンド・ビルト政策である。

いうまでもなく鉱山保安法は、鉱山労働者の安全衛生面を強化し、作業及び施設の機能を補管するための法律であるが、肝心な技術的体形はもちろん、学術的指針さえ確率されていなかった。

名著「鉱山保安学」は、こうした背景を踏まえて、1951年1月に発行された。当時の学科主任・故中野実教授(まことに残念なことながら、停年を1年残して逝去された)を中心とした若手の先生方(当然、故人も含まれる)のご努力が結実したものである。端島炭鉱での実習といい、この名著に接したことが、のちに私をして保安・安全への道を歩ましめる大きな動機になった。

朝鮮戦争が引金(といっは申しわけないが)となって息を吹き返したわが国の石炭業界も新しいエネルギー源である石油の飛躍的進出と、国内炭埋蔵量の枯渇化によって次第に沈滞し、出炭5000万t体制は困難な情勢になる。かくして政府は石炭調査団を編成し、炭鉱機能の実状調査を行い、自立可能炭鉱には積極的な助成(ビルト)を、また不可能なものは縮小・撤退(スクラップ)を勧告することになった。要するに

政府は、民間人による憎まれ役を創設したのである。第一次調査団の随員であった故人の机は、延命陳情書の山が築かれ、電話のベルがしょっちゅう鳴り響いていたそうである。

シベリア抑留という国際法無視の暴挙によって、多くの日本人が苦渋の道を歩まされた。しかし故人はその間、ロシア語をマスターされた。理工学部のロシア語特別クラスの講師として、また炭鉱技術誌「ウーゴリー(ロシア語で石炭のこと)」の翻訳活動に参画された事、等は、意外に知られていないと思う。

「つき合いの良い人」、「気軽に相談できる先生」という評価は、もちろん故人の天性によるところであろうが、それが彼の抑留時代に身をもって体験された苦難の克服によって、更に磨き<sup>カ</sup>が掛けられたからではなからうか。

ともあれ先生の部屋には、学生や卒業生がよく押し掛け、やがては酒宴へと流れ込むというケースが、しばしばあった。「親分」という渾名が何時しか生まれたのも、むべなるかなである。

骨材という、いわゆる学者・研究者先生方には、まったく馴染みのない、かつ蛇蝎の如き存在とみられていた資源の開発技術発展に力を盡され、骨材資源工学会という学会の存在を世に知らしめてたのも、故人の絶大な功績の一つである。地下資源、それは鉱物ばかりではなく、岩石、砂利もまた資源であり、開発技術はもちろん、作業安全、環境対策も鉱業におけるそれと何等変わるところがない。むしろ今後の国内鉱業技術は、この面に傾注され、かつ存続させるべきである、というのが自論であった。

中国の古い教えに、「桃李不言。下自成蹊」というのがある。中国人が好む桃やすも(李)の花や木は一言も喋らない。しかしそれを見に来る多くの人々によって、木の下には何時しか小路(蹊)ができる、という意味である。現代風にいえば、不言実行であろうか。しかしそれよりも、遙かに深い意味を持つこの教えは、故人の生きざまをそのまま物語っていると思う。

合 掌

## 追悼 大塚良平先生を悼む



### 大塚良平先生経歴

大塚良平（おおつかりょうへい）：大正11年9月23日東京に生まれる。東京開成中学校、第一早稲田高等学院を経て昭和25年3月早稲田大学理工学部採鉱冶金学科卒業、同大学院理工学研究科を経て昭和32年4月早稲田大学第一理工学部助手、同34年専任講師、同36年助教授、同42年教授、平成5年3月定年退職。同年名誉教授となる。平成8年1月7日逝去。昭和34年黄鉄鉱の特性と結晶の不完全性に関する研究により工学博士。この間の主な公職、学内：早稲田大学理工学部資源工学科主任、早稲田大学鑄物研究所（昭和63年11月材料技術研究所に名称変更）管理委員、早稲田大学商議員、学会：日本粘土学会会長、日本熱測定学会会長、日本鉱物学会・日本鉱業会・窯業協会・石膏石灰学会各評議員、官庁その他：科学技術庁資源調査会専門委員、日本学術振興会111委員会委員。

## 大塚良平先生を悼む

早稲田大学教授（教育学部）

鞠子 正

大塚先生は平成8年1月7日虚血性心疾患のため急逝されました。先生は古希のお祝いの後、健康が優れず病院通いを続けておられましたが、奥様の不休の看病の甲斐もなく1月7日病状が急変し、ついに不帰の客とされました。まことに悲しい事でございます。先生はまだまだお若く、あの厳しいご批判、心強い励ましのお言葉を永遠に失ったことは、私ども後輩にとり痛根の極みであり、この気持ちをなかなか言葉では言い表わすことができません。

大塚先生は大正11年（1922）年9月東京にお生まれになりました。名門開成中学校（旧制）から海軍経理学校に進学されましたが、不幸にして病に犯され、早稲田大学第一高等学院に再入学、さらに理工学部採鉱冶金学科（資源工学科の前身）に進まれました。その後、闘病と勉学の繰り返しが続き、通常より4年遅れて昭和

25年3月同学科を卒業され、やや遅れて27年4月新制大学院の第2回生と漸く研究生活に入られました。先生は大手術によって身体上のハンディキャップを負われましたが、長い病気との戦いの間に不屈の闘志を養われ、それからの研究と教育の生涯の糧とされたのだと思います。爾後、黄鉄鉱の半導体的性質と地質温度計に関する研究により昭和34年3月工学博士の学位を取得、同年4月理工学部専任講師に任用され、36年助教授と順調に進まれました。先生の研究は鉱物学、結晶科学の知識・研究手法を基礎としてこれを工業原料鉱物、無機材料、セラミックスなどに応用するものでその対象とするところは粘土鉱物、炭酸塩鉱物、沸石、二酸化マンガ、アパタイト、層状ポリ珪酸塩など極めて多岐にわたり、先生の標榜された「鉱物工学」の発展に輝かしい成果をお挙げになりました。



先生はまた多くの優れた研究者・技術者をお育てになりました。大塚研究室から巣立ったかっつての若き学徒は、今や大学・国公立研究機関・企業などで指導的立場にあって、先生の研究とフィロソフィーの更なる発展に懸命な努力をしております。

昭和27年の春、卒論のために入った早瀬研究所で、私は初めて当時院生であった大塚先生にお目にかかりました。それ以来本当に長い間お世話になりました。有り難うございました。どうかこれからも私達後輩や弟子達をお見守りください。

## 大塚岩石研究室卒業生として

合同石油開発

白石 富士雄

(昭和34年学部卒)

私が先生に初めてお目にかかったのは私が2年生の時でありました。九州の阿蘇火山の中で生まれ育った者として岩石学に興味をもったのは自然な成り行きであったと思います。当時、大塚先生は早瀬教授の助手であられ、私の初歩的な関心に対して真面目にしかし、にこにこしながらご説明戴いた事を今でも思い起こすことができます。そして、その真面目でしかも暖かい先生の物腰に引かれて卒業論文を先生の所で書くことになったのだらうと思います。この卒論は鞠子先生や堤先輩のご指導により何とか完成することが出来ましたが、この時地質学を専攻する上で必要とされる重要な資質の何かは私には完全に欠落していたことは先生もご承知のことでした。さて、卒業はしましたが私の目指していた硫黄鉱山からの求人は、石油の脱硫により生産される安い硫黄が市場に出回り始めた当時の状況を反映して皆無でありました。それでも、もう一年待つ事になり大塚先生の個人助手として学校に残ることになりました。この一年間は就職浪人でもあった私にとって精神的に極めて厳しい一年間でありました。しかし、先生の岩石研の家族的な雰囲気の中で数多くの実験を通じて先生の直接のご指導を賜りました。そして先生のお勧めで、結局、石油開発会社に就職しエンジニアとして生きることになりましたが、技術屋としての考えの方の基礎がこの時に植え付けられたと思います。それはデーター

を重視しながらデーターを盲信しない姿勢であります。就職した後も何かにつけ色々と先生のお世話をいただきました。その中でも先生に仲人をして戴けたことは私の家族の最大の誇りであります。

先生の自然現象に対する厳しい視線と同時に先生の人間関係に対する明るいおらかな視線が数多くの学生を引き付け、その薫陶を得て飛び立ち、今日では各方面で大いに活躍していると聞いております。そして、その中の少なくない人達が先生に仲人をお願いしましたが、それは先生のお人柄に対する憧憬であり、私達の先生との絆を更に深める為であつたらうと思います。私達は先生に先生の教え子としての生き様を見てほしかったのです。

8日朝、先生の突然の悲報に接して、以来、余りにも強すぎる衝撃により何故と言う以外のことには思いが及ばなくなりました。何故そんなに早く旅立たれたのですか。多数の教え子達の自慢話をもう聞いて頂けないのですか。人生のはかなさと侘びしさをこれ程感じたことは自分の親との死別の時以来の事です。

しかし、もう泣き言は止めましょう。江戸っ子の先生にまた何か言われそうですから。

安らかにお休みください。そして、たまにでも良いですから、私どもの夢でお会いしていたいただければ願っています。

# 資源工学科の動き

1995年度

## 1. 日誌

- 4月1日(土) 入学式(全学)
- 4月3日(月) 始業式、資源工学科入学者97名  
(内女子13名、石神井高等学校推薦6名、  
本庄高等学院推薦3名、早稲田実業推薦2  
名、早稲田高校推薦1名、一般高校推薦8  
名) 新入生担任は名古屋俊士教授
- 4月21日(金) 資源工学会総会、大隈会館にて  
開催、参加者87名
- 6月10日(土)、11日(日) 新入生オリエンテーシ  
ョン、追分セミナーハウスにて開催
- 6月23日(金) 1996年度修士課程推薦入学者決  
定27名(内教育学部7名)
- 7月10日(月) 吉澤奨学金および資源工学会奨  
学金授与式、第6回吉澤奨学生として次の  
2名に授与、修士1年大貫憲二、修士2年  
森永進一郎、また第2回資源工学会奨学生  
として次の1名に授与、学部4年張 尤秀
- 9月7日(休)、14日(休) 大学院修士課程入学試  
験
- 9月22日(金) 大学院修士課程入試合格者発表、  
資源工学分野20名(内女子0名)
- 11月3日(金)～5日(日) 理工展開催、資源展の  
テーマは「飛びだせ石ころ」で貴石の研磨  
を実施
- 11月18日(土) 一般高校推薦入学面接試験、推  
薦者数7名(内女子2名)の合格を承認、  
また早稲田実業2名、早稲田高校1名の推  
薦者の受入れを承認
- 12月9日(土) 資源女子会、理工レストランに  
て開催
- 12月16日(土) 現場実習報告会、11組29名の報  
告を実施
- 1月11日(休) 新年会、非常勤講師の先生方を  
御招待して大隈会館にて開催
- 2月10日(土)、13日(火) 卒業論文審査会
- 2月15日(休)、16日(金) 修士論文審査会
- 2月19日(月) 理工学部入学試験
- 2月29日(休) 石神井高等学院6名、本庄高等  
学院3名の推薦者受入れ承認
- 3月25日(月) 学部卒業式、学位授与式(課程  
によらぬ博士学位授与式は3月29日)

## 2. 就職・進路

学部卒業者：90名(内女子5名、外国人1名)  
大学院進学者：34名(内、早大27名、東大7  
名)  
学士編入希望者：2名  
鉱業・金属関係：新日本製鐵、日鉄鉱業  
石油・ガス・エネルギー関係：アンダーセン  
コンサルティング、石油公団、石  
油資源開発、帝国石油、東海テク

ノ、三井石油  
化学・セラミックス関係：信越化学工業、ミ  
ドリ十字  
機械・電気・エンジニアリング関係：今仙電  
機製作所、クボタ環境サービス、  
シャープ、セイコー電子工業、タ  
クマ、東京R & D、東京電力、日  
本コントロールシステム、古河電

気工業、ミネピア、ワカスギ  
**土木・建設関係**：日特建設、ニチレキ  
**情報・ソフトウェア関係**：NTTソフトウェア、CSK（2名）、ティージー情報ネットワーク、日本総合研究所、日本放送協会、南日本新聞社  
**商社関係**：岩谷産業、ザ・トーカイ、蝶理、東京興業貿易商会、丸紅ジュエリー、三菱商事  
**運輸関係**：全日本空輸、名古屋鉄道  
**金融・損保関係**：熊本ファミリー銀行、三和銀行、三井海上火災生命、三井信託銀行、山一証券  
**その他**：日本たばこ産業、ワールド  
**修士修了者**：45名（内女子1名、外国人3名）  
**博士後期課程進学者**：早稲田8名  
**鉱業・金融関係**：国際協力事業団、日本セメント、三菱マテリアル、ニチアス  
**石油・ガス・エネルギー関係**：インドネシア

石油、大手開発、基礎地盤コンサルタンツ、コスモ石油、東京ガス、トーコー地質、三菱石油、モービル石油

**化学・セラミックス関係**：東芝セラミックス  
**機械・電気・エンジニアリング関係**：新菱冷熱工業、スズキ、東洋エンジニアリング、日本精工、日本電気（2名）

**土木・建設関係**：鴻池組、J R東海建設、東急建設

**情報・ソフトウェア関係**：興銀システム開発、資源総合システム、トランス・コスモス、日本電信電話、博報堂

**商社関係**：長瀬産業

**運輸関係**：日本航空

**金融・損保関係**：日本合同ファイナンス

**公共機関**：佐賀県職員、労働省

**その他**：日本たばこ産業、ファミリーマート

### 3. 博士(工学)学位取得者

#### 課程によるもの

加藤 潔：紀伊半島中東部、秩父累帯の地帯構造論

小林 健太：跡倉ナップの構造発達史

#### 課程によらないもの

伊藤 俊秀：コンピュータを利用した砕石産業の情報管理に関する研究

野田 英俊：高炉用新塊成鉱製造プロセス開

#### 発の研究

東原 雅実：地熱地域における土壌ガス中の炭化水素の分布－PETREX FINGERPRINT 法の地熱調査への応用－

村山 秀幸：不連続性岩盤斜面の安定性評価における調査・解析・掘削に関する研究

### 4. 専任教職員の構成

岩崎 孝教授の早期ご退職、内田悦生助教授の教授昇格、毎熊輝記教授の新任、安井万奈氏の助手解任のため、1996年度の教職員の構成は以下ようになります。

**教 授** 在原 典男 石油工学研究室  
 内田 悦生 資源地球化学研究室  
 大和田秀二 原料工学研究室

佐々木 弘 水環境工学研究室  
 名古屋俊士 環境安全工学研究室  
 野口 康二 探査工学研究室  
 原田 種臣 原料工学研究室  
 毎熊 輝記 探査工学研究室  
 森田 信男 岩盤工学研究室

**助 教 授** 山崎 淳司 応用鉱物学研究室

技術職員 三浦 仁 資源工学科実験室  
事務職員 吉田喜代子 資源工学科事務所  
学科主任および学年担任  
学科主任 名古屋俊士

4年担任 在原 典男 (就職担当)  
3年担当 野口 康二  
2年担当 名古屋俊士  
1年担当 佐々木 弘

### 編集後記

○1995年度中に本資源工学会の3人の名誉教授、伏見先生、萩原先生、そして大塚先生がご逝去されました。先生方が本会と資源工学科に残されたご功績は生き続けており、今後も長く引き継がれることと信じています。ご冥福をお祈り申し上げます。

○1995年度をもって、岩崎孝教授が65才で退職なさいました。先生は1953年に本学鉱山学科をご卒業以来、43年間を早稲田とともに過ごされた正真正銘のワセダニアンです。早稲田を愛し、学生を愛し、酒をこよなく愛する名物先生でした。岩崎先生が学科を去られ、また少し寂しくなります。本号は先生の退職記念号として、先生のご友人、研究室出身の方々に寄稿をお願いしました。原稿をお寄せ下さった皆さんにお礼を申し上げます。

○1996年度は毎熊輝記教授が教室にお戻りになりました。先生は1963年に資源工学科をご卒業になられました。先生は探査工学分野を担当されます。それにより、資源科学部門 (内田、山崎)、探査工学部門 (野口、毎熊)、開

発工学部門 (在原、森田)、原料工学部門 (大和田、原田)、及び環境工学部門 (佐々木、名古屋) の5部門で教員二名体制となりました。○本学科に限らず、本学理工学部および大学理工学研究科への志願状況に変化が起こりつつあるようです。政治経済社会の変遷期にあたり、十八才人口の長期的な減少傾向、主要国立大学の大学院大学化など外部要因が変化しており、その影響は避けられないと思います。学部大学院ともいろんな角度からこの対策を検討しています。本学科の五部門体制もその一環として有効なものにしなければならぬと思います。資源・エネルギー・環境は産業社会の基盤であることから、本学科は資源工学を標榜しておりますが、この名称は幸いにも教室の諸先輩の遺産と卒業生の皆さんの活躍に支えられていると思います。私ども教員に課せられたことは優れた教育研究の環境を作り、実力を持った卒業生を世に送り出すことと理解しております。

(在原典男 記)

〒169 東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話：03-3203-4141 内線73-2137

振替番号：00110-9-143534